



”予感”後編 Bパート



yasuhiro

私の選択

(事件は夢の中での出来事だけど、現実にならない保障なんてない。正夢という可能さもある。)

よくない方向へ思考が加速する。

「顔色悪いけど、大丈夫か？」

彼の声で現在の状況を思い出す。

彼の声から心配してくれていることがわかった。

彼の方を見た。

予想どおりに彼がこちらを心配そうに見ていた。

(顔に出てたかな？心配かけちゃったかな？)

少し、申し訳ない気持ちになった。

彼を見つめながら、少し考える。

(でも、彼の命が係っている。言うなら今のタイミングしかない。)

決心した。石島君なら信じてくれると思った。

「あの、その、あのね。」

緊張してしまって、うまく喋れない。

「どうした？改まって。」

彼は真面目な顔でこちらを見つめている。

「今日さ、石島君の家まで一緒に行っていていい？」

彼はなんで？と不思議そうに顔を横に少し傾げる。

「あの… 夢を見たの」

「夢？」

「うん。とても怖い夢。」

「怖い夢を見たのか。」と口に出して、少し間があって、「どんな夢だったの？思い出したくないのならいいのだけれど。」

彼はこちらのようすを伺いながら、後半早口で喋った。

その気遣いが少し嬉しかった。

「うん。大丈夫。その夢はね、石島君が事故に巻き込まれるの。」

「え」

そのことを聞いて、彼は驚いたような表情になった。

「それは本当なのか？」

「うん。」

「でも、それは夢だよな？」

「うん。でも、随分、現実味があつたから本当に起こるような気がして。」

彼は悩んでいるようだ。時折、「う～ん」と唸っていた。

それから、少しして、なにかを決心したような表情をした。

「よし。それじゃ、家まで西山に護衛してもらおうかな。」

彼は悪戯っ子のような笑顔を浮かべた。

(よかった。信じてもらえたのかな?)

断れなかったので、安心した。

「うん。任せて。」

こちらも笑顔で返した。

これが私が選んだ道？

この踏み切りを渡るのは初めてだ。いつも、この踏み切りの前で別れて、私は線路に沿って家に帰るからだ。心が躍っていい気分だ。

歩きながら石島君と夢とは関係のない、勉強のことを話した。

ふと、先生の言葉を思い出し、石島君に聞いてみた。

「将来のこと考えてる？進学するとか、就職するとか。」

彼は「う～ん」と唸って、少ししてから口を開いた。

「決まってないかな。」

「以外だな～。石島君はてっきりもう決まってるのかと思った。」

「でも、多くの人を助けられる仕事に就きたいかな。」

彼は前を向きながら、真剣な表情で言った。

「いいと思う。なんか石島君らしいし。」

すると、彼は笑顔を返してくれた。

顔の方向を前に戻すと、交差点の歩道の信号が青になったのが見えた。

(渡れそうかな？)

歩くスピードを緩めず歩く。

「西山は決まってるのか？」

「え！ 私？ 決まって…」

ちょうどその時、横断歩道を渡っていたときだった。

ブーンとすごい大きな音が聞こえた。

「西山」という彼の声を聞こえたと思ったら、その直後、体に衝撃を襲った。

視界が暗い。

なにも見えない。

私、なにしてたんだっけ？

顔を上げる。視界が徐々に明るくなり、「白」が目にはいる。

(ここは、どこ？)

周りを見渡すと一つの可能性が思い立った。

(病室？)

私はベッドに横たわっていたようだ。

(私はなんで、病室に？ なぜ、ベッドに寝ていたのだろうか？)

そこで、ガラガラと扉の開く音が耳に入ってくる。

(誰か、来た？)

顔を扉の方へ向ける。

そこには、白衣に身を包んだ、一人の女性が立っていた。

身長は170ぐらいだろうか？ 背が高く見える。

その女性はやさしい微笑みでこちらを見つめていた。

その微笑みのまま、ゆっくりとした口調で話す。

「起きたのね。調子はどう？どこか痛む？」

「大丈夫です。痛いところはありません。」

続けて、

「あの、ここはどこなんですか？ここにいた理由が思い出せなくて。」

「そうだったね。あなたは気を失っていたから、ここにいる理由を知らないわけね。」

と言い、なにかに納得したように、2回頷く。

彼女は真剣な表情になって、

「あなたは事故にあったの。」

「え？」

突然出てきた単語に驚く。

(事故？)

「いえ、正確には事故に遭いそうになった、というべきね。」

続けて、

「事故に遭いそうになったあなたを助けた人がいるの。」

いやな予感がした。

彼の顔が脳裏を過ぎる。

「もしかして、石島君ですか。」

「そう彼。今、彼は集中治療室にいるわ。」

(大きな怪我とかしたときに、運ばれる場所だったような。)

(もしかして、彼が私の身代わりに？)

「石島君は大丈夫なんですか？」

体が自然に前屈みになる。

「わからないわ。今のところ。でも、やれることはやってみるわ。」

「よろしくお願いします」

精一杯、言って深く頭を下げた。

顔を上げたときには、彼女は扉の前でこちらを向いていた。

「体調は大丈夫そうだけど、体を休めた方がいいわ。」

と一言伝えて、彼女は病室から出て行った。

辿り着いたところ

次の日、精密検査を受け、「異常なし」との結果が出て、夕方には退院した。しかし、その日、一人の命が消えた。

退院してから、2日後。

そのことを知った私は家出をした。

バイトはしていなかったが、ここ、2年間ぐらい、おこずかいをためていたお金を使った。

住みなれた場所を離れ、最近出来た「塔」がある町にやって来た。

人口は数百人の小さな町だ。その町は町おこしのためにその「塔」を建設したようだ。

今では、ちょっとした観光名所だ。

バスを降りると、吸い寄せられるようにその塔へ向かった。

最近では、食事も喉を通らない。そのためか、体力も落ちてきたように感じる。

定期的に休憩を取って、塔に向かう。

塔に向かう途中、よく声をかけられる。

「大丈夫かい？」

「休んだほうがいいじゃないかい？」

大体が祖母、祖父にあたる年代の人たちだ。

(顔に出ているかも。)

こうしたやさしさも、こうゆう状態じゃなければ、素直に喜べたのだろう。

精一杯の笑顔で「大丈夫です。お構いなく。」と言ってごまかした。そして、塔に辿り着いた。しかし、心が晴れることはなかった。

石島君の知らせを聞いてから、心は体の奥深くに沈んだままだ。

彼の存在が大きくなっていたからであろうか。それとも、助けてもらったからであろうか。

心は彼のことで満たされていた。

外からの情報は拒絶されて、受け止められない。

(石島君、もうちょっと待っててね。)

私は塔の内部へ向かった。

塔の中央にあるエレベーターに乗った。そして、そのエレベーターで最上階まで行く。

そこは、町全体を見渡せるというところだ。

エレベーターの扉が開いたので、エレベーターの外に出る。少しの間、眩しさに視界が塞がれる。

大きな窓に近寄ると、町全体がよく見えた。この町の外の町まで見えた。しかし、この高さは高いところが苦手な私にとって地獄のようだ。

今すぐ、エレベーターで地上に戻りたい。でも、戻れない。

“私にはやることがある。”

人が多くいるところの方がいい。できるなら、従業員との接触は避けたい。

(ここなら。)

4つある扉の内、ツアー客たちがガイドの説明を聞いている、近くの扉にした。

静かに重い扉を開ける。開いた。そして、音を響かせないように外へ出て、ゆっくり扉を閉める。

少し、安心感が体を支配する。

ヒューと風の音が聞こえる。

フェンスはあるが飛び越えられないほどではない。

さっき、外を見てしまったから、足の振るえが止まらない。

でも、私は彼のところへ行くと決めたんだと自分に言い聞かせ、足に力を込める。

体が前に進む。

町全体が視界に入る。そして、視界が下にスライドする。

目を瞑る。

(これでやっと…)

(あれ？ 衝撃がない。風の音も止んでいる。)

不思議に思い、目を開ける。

すると、白い天井があった。

(あれ？ どこかで見たような？)

「西山！」

大きな声で私のことを呼ぶ声が聞こえる。

石島君だ！と思い、声が聞こえてきた扉の方へと視線を向ける。

そこには血相を変えた表情の石島君がいた。

やっと会えたと思えた。

なぜだかわからないがそう思った。

「西山、大丈夫なのか。体調は悪くないか！」

彼は近くまで来て、少しまへのめりで言った。

こんな石島君は初めて見た。本人は必死なのかもしれないが、その気持ちが嬉しかった。

「大丈夫だと思う。体調も悪くないし。」

彼を安心させるために、笑顔で答えた。

「そうか、そうか。よかった。」

そこには満面の笑みの石島君がいた。

少し、名残惜しいけれども、なにか起こったのかが気になったので聞いてみた。

「石島君。私は気を失っていたみたいだから、記憶にないのだけど、なにかが起こったの？」

と私は言い、彼の方へと顔を向ける。

真剣な顔になり、話始める。

「俺が事故にあった夢を見たと言って、俺の家の前まで一緒に行くことになったことは覚えているか？」

「うん。かすかに。」

「向かっているときに将来のことを聞いてきたときがあっただろう。」

「うん。」

「俺が西山に将来のことを聞こうとしたときに、自動車が猛スピードで左折してきたんだ。」

「そうなんだ。なんかすごい大きな音は聞いたような気がする。」

「自動車の進路上に西山がいることに気がついたから、西山の手を強く引いたんだ。」

「だけど、このままじゃ、道路に体がもろにぶつかると思って、咄嗟に抱え込んだけど、頭までは庇えなかった。」

「それで、気を失った西山はこの病院に運ばれてきたんだ。」

「そうだったんだ。」

石島君は申し訳なさそうに話しているけれど、石島君がもし、そうしてくれなかったら、このぐらいじゃ済まなかっただから、石島君には感謝している。

彼には、大変な迷惑をかけてしまったようだ。でも、石島君との距離が少し近づいたような気がする。

申し訳なさそうな顔をしている彼に向かって、

「起こってしまったことは仕方がないよ。それに、石島君がそうしてくれなかったら、もっと大変なことになっていたのだから、ありがとう。」

精一杯の笑顔で言った。

そうしたら、彼も笑顔を返してくれた。